

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：33921

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07319

研究課題名(和文)近世文人旗本の東西交信記録の研究

研究課題名(英文)Research on Correspondence between Kamigata and Edo Intellectuals

研究代表者

ワクダ マサキ(WAKUDA, Masaki)

愛知淑徳大学・文学部・助教

研究者番号：40780169

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：江戸時代中期の文人旗本三橋成烈(みつはしなりてゐる、1726～1791)が安永期(1772～1780)の大坂在番中に江戸在住の親族朋友と交わした往復書簡集『飛檄(ひげき)』、『飛檄随筆(ひげきずいひつ)』の校注作業を行った。また、上記の作業を通して得られた情報をもとに、成烈作の読本『新斎夜語(しんさいやご)』、『続新斎夜語(ぞくしんさいやご)』の読解を試みた。

研究成果の概要(英文)：This research worked on the collation editing of MITSUHASHI Nariteru (1726-1791)'s "Higeki" and "Higeki-zuihitsu". "Higeki" and "Higeki-zuihitsu" are collections of letters which Nariteru exchanged with his relatives and friends in Edo region during his residences in Osaka. Furthermore, through the research above, Nariteru's "Shinsaiyago" and "Zoku-shinsaiyago" text analyses were also held.

研究分野：国文学

キーワード：国文学 伝記 書誌 出版 書簡 上方 江戸 大番

## 1. 研究開始当初の背景

江戸時代中期には、文人的な気質を備えた著述家が数多く現れた。文人とは、読書家・知識人であり、俗であることを嫌い、創作活動に携わるが、それを生活の手段とはせず、趣味的・余技的、それゆえ、活動は特定の分野に偏らず自在、多芸多才をもって知られる。そうした人々の代表格に、上田秋成(1734～1809)、木村兼葭堂(1736～1802)、大田南畝(1749～1823)等がいる。近世文学研究では、文献資料が前代に比べて豊富に残っていることもあり、個々の文人についての伝記研究が早くから行われてきた。その主要なものに、森繁夫・森銑三・丸山季夫・中村幸彦・水田紀久・高田衛・多治比郁夫・中野三敏・日野龍夫等による業績がある。

申請者のワクダは、これまで契沖(1640～1701)・平間長雅(1635～1710)・北村季吟(1625～1705)といった江戸時代前期の上方の古典学者およびその周辺人物の学芸活動に注目、関連資料の収集や整理を進めてきた。その過程で、後代の文筆家の編著書類に、しばしば上記の古典学者の影響が直接的、あるいは間接的なかたちで現れているのを目にしてきた。本研究で取り上げる三橋成烈も、そうした事例のうちに入る。

一方、伝記研究を進めるにあたっては、公となることを前提に書かれた作品類だけではなく、日記や書簡のような、私的な資料が残っているかどうかが重要となる。そうした資料は、古人の姿を浮かび上がらせるうえで、作品類にはない、有力な情報をもたらしてくれる。三橋成烈の書簡資料の伝存については、既に綿谷雪「洒落本『辰巳之園』の著者=夢中散人寝言先生の本体=」(『書物展望』第10巻第1号、1940年)、中野三敏「『辰巳之園』解題」(『洒落本大成』第4巻、1979年)、市古夏生「梅臚館主人と飛檄連中—『飛檄』『飛檄随筆』を通して—」(『近世文学研究の新展開—俳諧と小説』、2004年)に指摘がある。しかし、書簡資料の全貌も、それらが本来備えている価値についても、未だ十全には明かされていない状況にある。

申請者も、ワクダ・浜田泰彦「『新斎夜語』解題と翻刻」(飯倉洋一編集、2004—2006年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書『「奇談」書を手がかりとする近世中期上方仮名読物史の構築』、2007年、大阪大学大学院文学研究科。解題の執筆はワクダが担当)で成烈の略歴を記述、書簡資料の伝存に触れたが、当時はそれを適切に読みこなすだけの能力を備えていなかった。そのため、『飛檄』については、「編者成年とも未詳、写本一冊」という不十分、かつ悔いの残る書き方となってしまった。ここにあらためて書簡集『飛檄』『飛檄随筆』を取り上げ、旧稿の不備を補いたい、と強く願うようになった。

以上の経緯により、本研究の申請に至った。

## 2. 研究の目的

2年の研究期間を通して、以下の作業に取り組む。

(1) 三橋成烈の往復書簡集『飛檄』『飛檄随筆』の全文の紹介

『飛檄』には約20通、『飛檄随筆』には約60通の書簡が収録される(複数の書簡が同時に発信されることがしばしばあり、その場合は便宜的に1通として計算、枝番号を付けて処理する)。大坂と江戸という遠隔地間の交渉ゆえ、内容のある、長文の書簡が多い。それらの全文を、利用者に利用してもらいやすいかたちで、すなわち、翻刻・校訂・施注して、提供する。さらに、目次・人名索引・書名索引を作成し、解題を執筆する。

(2) 三橋成烈年譜の作成

従来、知られてきた三橋成烈の編著や古典籍・古書画の書写活動の情報に加え、書簡集の校注作業を通して明らかとなる、成烈の事蹟を網羅的に収集、年譜を作成する。

(3) 三橋成烈をめぐる人物交流、書物交流の実態の解明

三橋成烈は、大番(江戸幕府の役職の一つで、全十二組の編成。平時は江戸城二ノ丸、西ノ丸等の警衛にあたり、定期的に上方に赴いて二条城と大坂城の在番を果たした)の組に所属していたため、定期的に京・大坂に派遣され、その都度、任地に一年ずつ滞在するという生活を、二十五歳から、おそらくは、死没の六十六歳まで続けたと見られる。その結果、本拠の江戸だけではなく、京や大坂、伊勢でも交際圏を形成、各所で文学的営為に携わっている。その実態を、具体例を挙げながら、明らかにする。

(4) 三橋成烈刊行作品の検討

三橋成烈には、「梅臚館(館)主人」の筆名を用いて、生前、自ら世に送り出した散文作品が三点ある。明和四年(1767)刊の教訓本『童女教訓』松間鄙言』、安永四年(1775)刊の読本『新斎夜語』、同八年(1779)刊の読本『続新斎夜語』である。それらを考察の対象とし、措辞表現に注目しながら、創作の理念と方法を読み解く。それにより、成烈刊行作品を近世中期文学史上に位置付ける。

## 3. 研究の方法

「2. 研究の目的」(1)から(4)に掲げた事項のなかでも、(1)は、本研究の出発点であり、研究期間全体を通して行う、最も大きな比重を占める作業となる。ほとんどの時間を、自宅や勤務先の研究室に籠もって校訂本文の作成に努めること、また、図書館や文庫に出掛けて関連資料を繰り、用例の探索に努めること、に割く。「研究目的」(2)

(3)(4)も、(1)の作業の過程で得られる情報や視点から発展させることになる。

#### 4. 研究成果

(平成28年(2016)度)

三橋成烈の往復書簡集『飛檄』『飛檄随筆』の校注作業を行った。具体的には、①星槎ラポラトリー蔵『飛檄』(原書簡の合綴本一冊)と東京国立博物館蔵『飛檄随筆』(転写本一冊)の全文を、紙焼写真をもとに読解、翻字した。②紙焼写真が不鮮明であった箇所や、ノドにかかっている読めなかった箇所を、原本で確認した。③『飛檄随筆』は、転写本という事情もあって、誤写や誤脱が少なくない。そのため、早稲田大学図書館蔵の異本『飛檄帖』(転写本三冊)と対校、異同状況を注記した。④上記を踏まえて、両書の全文に施注(作業は現在も継続中)、人名索引・書名索引・三橋成烈年譜の粗稿を作成した。⑤翻字の誤読や誤植を修正するとともに、注釈の不備を補訂した。さらに、注釈の内容を充実させるべく、関連資料を調査、収集した。

上記の研究成果の一部は、江戸時代怪談文芸名作選第二巻『前期読本怪談集』所収の『新斎夜語』「解説」で、成烈の学芸活動に関する略年譜を掲載するとともに、公表した(「5. 主な発表論文等」の「[図書]」①)。例えば、①成烈が五十三歳の安永七年(1778)秋頃に冷泉為泰に入門したこと、②成烈が『続新斎夜語』の刊行以後、名所和歌集『駅路名所略』と歌紀行『勢州鈴鹿山麓孝子万吉伝』の原案を冷泉家に献上しており、和歌への関心を一層深めたいらしいこと、③『新斎夜語』の刊行以前、成烈は石門心学に親しんでおり、石門心学者との接触は晩年になっても続いていたこと、④成烈の交友圏には幕臣の知識人、歌人が多く、なかでも近藤義休、磯野政武、三枝守寿といった人々と懇意であったこと、⑤内山賀邸、萩原宗固、石野広通といった江戸堂上派の指導者たちとも交わり、歌学の教えを受けていたこと、などを、今回、新たに指摘した。

また、書簡集の校注作業を通して得られた情報を用いて、成烈の読本作品に分析を加えた。具体的には、①『続新斎夜語』第九話「三光院殿、再嵯峨の艸廬を訪玉ふ」が太宰春台著『弁道書』や林笠翁著『仙台間語』の記事と多く重なることを指摘、作品の背後にあった成烈の交友圏を確かめたうえで、作品の解釈を試みた。上記については、上方読本を読む会で報告を行った([学会発表]④)。②『続新斎夜語』第二話「浪華の五子、父の命を贖はん事を訴」が中井竈庵著『五孝子伝』の改作であることを指摘、作品の背後にあった成烈の交友圏を確かめたうえで、作品の解釈を試みた。上記については、東海近世文学会で報告を行った([学会発表]③)。

(平成29年(2017)度)

前年度に引き続き、三橋成烈の往復書簡集『飛檄』『飛檄随筆』の校注作業を行った。具体的には、①前年度に読解、翻字した粗稿に点検を加え、随時、増補改訂を施した。②

注釈の内容を充実させるべく、関連資料の調査、収集に努めた。

また、書簡集の校注作業を通して得られた情報を用いて、成烈の読本作品に分析を加えた。具体的には、①『新斎夜語』第五話「岐阜の老尼、出離の縁を明す」が契沖著『百人一首改観抄』、庄司勝富著『異本洞房語園』の記事と重なること、『新斎夜語』第九話「鍛冶国助、家業に託して士を諷ず」が文耕堂・三好松洛・小川半平・竹田小出雲著『新うすゆき物語』、橘守国画『絵本通宝志』と重なることを指摘、作品の解釈を試みた。上記については、東海近世文学会で報告を行った([学会発表]②)。②『続新斎夜語』成烈自跋中の成烈の和歌が平安鎌倉期の歌人西行の一首を踏まえて詠まれていることを指摘、作品の背後にあった成烈の経歴や交友圏、読書歴を確かめたうえで、作品の解釈を試みた。上記については、上方読本を読む会で報告を行った([学会発表]①)。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計4件)

- ① ワクダ マサキ、『続新斎夜語』跋文、上方読本を読む会、2018年
- ② ワクダ マサキ、文人旗本三橋成烈と『百人一首改観抄』『異本洞房語園』『新うすゆき物語』『絵本通宝志』、東海近世文学会、2017年
- ③ ワクダ マサキ、文人旗本三橋成烈と懐徳堂の教導書『五孝子伝』、東海近世文学会、2017年
- ④ ワクダ マサキ、『続新斎夜語』第九話「三光院殿、再嵯峨の艸廬を訪玉ふ」、上方読本を読む会、2016年

[図書] (計1件)

- ① ワクダ マサキ (共著)、国書刊行会、前期読本怪談集(江戸怪談文芸名作選第二巻)、2017年、193~280頁(『続新斎夜語』校訂)・365~379頁(『新斎夜語』『続新斎夜語』解説)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

①ワクダ マサキ（共著）、愛知淑徳大学、大学生のための読書案内2018—入門編一、2018年、46頁（『翁問答』紹介）

②ワクダ マサキ（共著）、愛知淑徳大学、大学生のための読書案内2017—入門編一、2017年、48頁（『翁問答』紹介）

6. 研究組織

（1）研究代表者

ワクダ マサキ（WAKUDA Masaki）

愛知淑徳大学・文学部・助教

研究者番号：40780169

（2）研究分担者

（ ）

研究者番号：

（3）連携研究者

（ ）

研究者番号：

（4）研究協力者

（ ）